

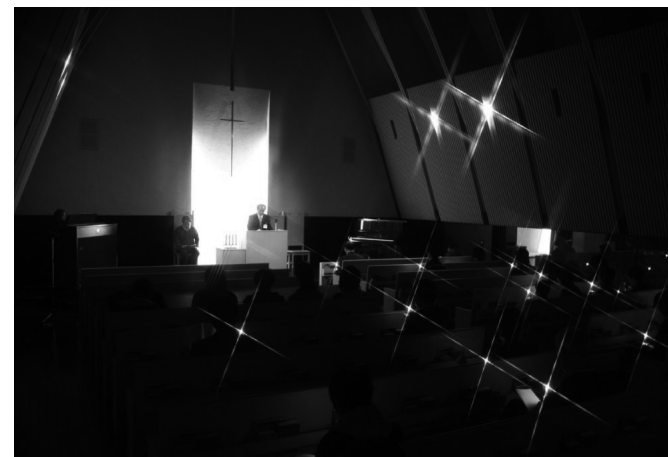
チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纒)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
- こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別 -
(荒井 英子)

目次

- 創立者クライン博士をつき動かしたの…… 秋重 泉 (2)
- 新入生のみなさんへ …………… (5)
- スピリチュアルと健康…………… 濱谷 勉 (7)
- 復活の喜び…………… 大宮 有博 (9)



大学クリスマス礼拝

創立者クライン博士をつき動かしたものの

秋 重 泉

そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者として見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるために来たのである。」

(新約聖書 マルコによる10章42～45節)

名古屋学院大学の前身であります名古屋英和学校は、アメリカのメリーランド州ボルティモアから派遣された宣教師、フレデリック・C・クライン博士によって「敬神愛人」を校訓として創られました。クラインを派遣したのは、メソジスト・プロテスタント教会で、現在もあるメリーランド州ボルティモアのセントジョン教会を拠点としていました。この教派は日本に宣教師を派遣し、東海道沿線に伝道していくつかの教会を建てています。名古屋では、現在日本キリスト教団に属している広路教会、熱田教会、中京教会などが、メソジスト・プロテスタント派の教会でした。

学校では名古屋学院とほかに、横浜英和女学院を設立しています。

さて、クラインは横浜に來日したときに、横浜本牧教会という教会を創りました。そして、横浜英和で教鞭を執った後、1887年に名古屋に來て我々の学校の前身である名古屋英和学校を創立しました。名古屋学院の創立の由来を伝える一冊の本をここで紹介したいと思います。名古屋高校の図書館で桐の箱に入って収蔵されている非常に貴重

な本なのですが、それは聖書注解書です。1846年にニューヨークで出版されています。日本では江戸末期で、明治維新の22年前になります。この本の表紙の裏に、ウイメンズ・フォーリン・ミッションナリー・ソサエティー・オブ・メソジスト・プロテスタント・チャーチ、日本語で言いますと“メソジスト・プロテスタント教会婦人海外伝道局”というラベルが貼ってあります。手書きのインクで“ジャパン・ナゴヤ”とも書いてあります。実は、メソジストプロテスタント派の日本伝道は最初、婦人海外伝道局が女性の伝道師を横浜に派遣して始まったのです。その時にブリタンという横浜英和を創った方が、この聖書注解書を持って日本に來たということが分ります。おそらくこの注解書は、クラインが横浜英和から名古屋に一緒に持ってきて、名古屋学院の中に持ち込んだのでしょうか。今は桐の箱に入っていますけれども、数年前に学校の図書館から電話が入りまして、処分する本の中にちょっと古そうなものがあるから見てくれと依頼を受けました。見に行ったら、名古屋学院の創立に関わる非常に重要な本だということ

とが判明しましたので、埃をはらって桐の箱に入れました。

この本を実際に読んだことのある、名古屋英和学校の第1回卒業生にイギリスで活躍した画家の牧野義雄という人がいます。なぜ、牧野がこの本を読んだのが分かるかと申しますと、本人の自伝の中で宣教師から英語の本を借りて読んだけども、聖書について説明してある本でつまらなかったということが書いてあるんです。牧野はイギリスで出版された「When I was a Child」という本の中で、英和学校での生活について詳しく書いています。例えば、クラインの人柄についても述べていますし、スケッチもその本の中に残っています。この本は豊田市教育委員会が「我が幼少の期」という題名で翻訳をしています。なぜ豊田市教育委員会が翻訳したかということ、豊田市の旧名の挙母(ころも)という所が牧野の出身地だったからなんです。牧野はいくつかの本をイギリスで出版しているのですが、私も数年前イギリスを訪れたとき、ある古本屋さんで牧野の本を一冊見つけて、大変嬉しかったことがありました。この「我が幼少の期」に掲載されているスケッチは我々の学校の最初の校舎を描いています。牧野がクラインに入学許可を懇願している絵もあります。この絵の中では、アメリカ製のストーブが学校の部屋に取り付けられています。またクラインは靴のまま畳のうえに立っています。このようなスケッチがこの本の中に描かれています。

クラインは日本伝道の報告をアメリカの本部に度々送っていますけれども、その中で最初の校舎の様子を次のように書いています。「ひさはしは地面に立って手で届きます。壁は、小さく切った藁を上手く混ぜ合わせた泥でプラスターのように塗ったものです。屋根はタ

イル、窓やドアは紙のスクリーンで、水を滑らして開閉します。」こういう風に書いて送っています。

クラインが始めた学校には、その当時はわずか12名の生徒しか集まりませんでした。名古屋に來ないで横浜にいたら、宣教師とはいえ比較的楽な生活を送ることが出来たんだろうと思います。当時の名古屋は大変に排他的で、仏教の盛んな地域だったのです。だから、石を投げられたり罵声を浴びさせられたりすることが度々あったようです。私は時々、クラインがどうしてこのような困難が予想されるような日本、あるいは名古屋に來たのだらうかと思うことがあります。私立学校は公立の学校とは異なって、ある意味、公立の学校が既にあるので、とりあえず必要がないところに創るわけです。存在する必要がないにも関わらず、建学の理念を掲げてこういう教育を行うから集まってくれと呼びかけて開校したのです。もともと私立は、公立の学校とは本質的に異なる学校であります。キリスト教主義の学校は当時の名古屋では受け入れられるのが大変困難であったでしょう。そんなところへクラインは第一にキリスト教で的人格教育、そして第二に英語教育をする、こういう理念で学校を創立したわけですから、名古屋の市民から反感を買うのも当然だったという風に思います。

クラインは建学の理念を「敬神愛人」と表しました。私は英語で「Fear God Love People」という風に表現したいと思います。神を敬うということはリスベクトではないんです。日本では尊敬すると解釈されるらしいですけれども、実は神を畏れること畏怖するという意味であります。神は畏れ敬う存在だということです。日本語で「神をも恐れぬ」という言い方がありますが、私た

ちはそうではなくて、人は畏れる存在をもつことにより自分の行いが正しい道に沿っているのかどうか考えなければならぬと、クラインは訴えたかったのではないのでしょうか。

次に人を愛するとはどういうことでしょうか。人が困っているときに救いの手を差し伸べる、聖書にも出てくる良きサマリア人のようなあり方、現代的に言えば積極的にボランティア活動が出来るような人、しかも大学生のレベルでいえば世界的視野をもってそういうことが出来る人、隣人愛を持っている人、そういう人たちは名古屋学院は育てなければならないのです。私たちの学校は根本にそのような方針を持っていなければならないのです。その意味で名古屋学院大学にはボランティアセンターがあって、活発に活動していると聞き大変嬉しく思っております。

今年の7月に初めてメリーランド州のボルティモアを訪れることができました。メソジスト・プロテスタント・チャーチの本拠地であったセント・ジョン教会、日本語で言えば聖ヨハネ教会を訪れ、またクラインが埋葬されている墓地も訪れ墓参をすることが出来ました。そこは名古屋の平和公園の何倍もある墓地なので、なかなかクラインの墓を発見することが困難なところなんです。でも幸い昭和20年代に名古屋学院に宣教師として来ていたジェラルド・ワイス牧師という方と連絡がとれ、クラインの墓まで案内していただきました。湿気の高い夕方のことでしたがクラインの墓の前に立つことが出来て感慨無量でありました。クラインの墓石には聖書の一節「Not to Be Ministered but to Minister」と刻んであります。これは本日読んだ聖書の箇所

にあります、「仕えられるためではなく、仕えるためである。」私はこれを読んで初めて、使命感を持って日本に来て、そして名古屋までやって来たクラインの気持ちが理解できたと感じています。

イエス・キリストは福音書の中で自ら足を洗って模範を示し、人を支配するのではなく、人に仕えるようにと教えてくださいました。キリスト教をイスラエル地方の一宗教からギリシャ、ローマなどの地中海地方の異邦人に伝えて普遍的な宗教としたパウロもまた、強い信念を持って伝道に励んだのですが、私はこのパウロとクラインの使命感には共通するところがあるように思います。イエス・キリストは、「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、多くの人の贖いとして自分の命を与えるためである」と、語りかけています。クラインもまた、キリストに倣って人に仕えるため、東海岸から当時開通したばかりの大陸横断鉄道に乗って、おそらくサンフランシスコから横浜に蒸気船で向かったのだらうと思います。私はあの時代に、太平洋を船で渡ったクラインの困難な旅は、エルサレムを出てコリント、ギリシャ、ローマへと地中海を船で渡っていったパウロの歩みに重なって見えるのです。

120年前にクラインによって蒔かれた一つの種が、今このように中高、大学と大きくなり、そして今皆さんが大学で学んでおられます。私たちは種を蒔いた人のことを忘れることなく、その願いを実現できるような歩みをいつも続けなければなりません。そうでなければ、名古屋学院、中学校あるいは名古屋学院大学それらの学校の存在の意味がないものであると思います。

(あきしげいずみ 名古屋中学校高等学校学監、元同校校長
2007.10.16 大学創立記念日礼拝奨励)

新入生のみなさんへ

敬神愛人



(F. C. クライン)

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』 — —
(新約聖書 マタイによる福音書22章36～39節)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの大学の学生となりました。これからの新しい学び、そして学生生活に、大きな希望を持たれていることと思います。

さて、これからの学びの場として選ばれたこの大学について、皆さんはどのようなことをご存知でしょうか。これからいろいろな機会に聞かれたり、読まれたり、学んだりされると思いますが、ここでも少しお話ししたいと思います。

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」を持って建てられ、またそれを継承して運営されています。わが名古屋学院大学の建学の精神は「敬神愛人」です。これは冒頭に書かれています新約聖書の、イエス様の言葉から来ています。

「敬神愛人」とは、人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛することを一番大切な掟として守らなければならないという、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良くしなさいというヒューマンイズムだけでなく、神を敬うことによって成立する隣人愛のことを言っております。本学では、それを教育の基本にしているのです。

スピリチュアルと健康

濱谷 勉

これが天地創造の由来である。主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

（旧約聖書 創世記2章4～8節）

人間の真の健康とは一体どういう状態のことなのだろうかということについて、少し皆様と聖書を通じ考えてみたいと思います。本日のお話のタイトルでもある「スピリチュアル」という言葉は、最近よく耳にするようになってきています。例えば介護の世界でもよく用いられるようになり、世界保健機構の条文の中でもこの言葉が登場しています。また、テレビ等で霊能者の方々の出演も多くあり、スピリチュアルヒーリングとかいうような言葉をよく聞きます。スピリチュアルの本来意味するところを考えてみますと、霊性とか、霊的といったことになります。

さてスピリチュアルという言葉は、ある意味宗教的な香りのする言葉ではないかと思えます。またこの言葉は、人間が「肉体と精神」の枠を超えた存在であることを示唆しているのではないかと思います。本日の聖書箇所によりますと、人間は創造主である神の作品であるということがはっきりと示されており、私は神の作品であるということの中に、進化論をはるかに超えた素晴らしい人間理解というものが出

められていると考えるのであります。人間は聖書にも書かれてありますが、命の息を神から受けた存在です。土の塵という物質的観点からすると、人間も動物と同じような共通するものを持つわけですが、しかし命の息というのは人間のみが吹き込まれた要素だということです。聖書には更に、人は生きる者になったとありますが、これはただ動くものになったといった動物的な存在を述べているわけではありません。人間が動物とは異なった霊魂のある存在である、ということを目指しているのです。つまり人間は、霊的な存在者（スピリチュアルな存在）であるということです。命の息を神から人間は分与されたわけですが、そのことによって実は、人間は自分を創ってくださった真の神に応答することが出来る、その様な存在になったわけです。つまり、真の生きる神と交流することができる宗教的、あるいは霊的な存在になったということです。そこところが人間が他の動物とは明らかに違うところなのです。

人間は、どの宗教の神かは別といたし

この麦粒に述べられていますように、1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン（F. C. Klein）という宣教師がキリスト教の伝道と英語学校を目的として来日しました。そして横浜に英語学校、教会を創るなど伝道の成果をあげ、彼が次の着任地として夫人とともに名古屋に来たのは1887年のことでした。そして名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたのです。その「愛知英和学校」は「名古屋英和学校」と改称され、これがわが名古屋学院大学の基となりました。

その時、クライン博士がその教育の基本理念として掲げたのが「敬神愛人」でした。

新入生の皆さんはこれから少なくとも4年間はこの大学の学生として勉強をしていきます。せっかくキリスト教主義大学に入学されたのですから、様々な機会を通して勉強のほかに、人間として自らを成長させていくことにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自分を愛するように他人を愛することができますように、また、人間の力を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間へと成長を遂げることができますように。

チャペルへの招き

チャペルではチャペルアワー、カレッジアワーと称してキリスト教の礼拝の時間を、下記のように設けております。教職員や近郊の牧師の奨励を聴き、賛美歌を歌います。大学は決して、皆さんにキリスト教の信仰を持たせようと思っているわけではありません。世界の大きな文化の源流の一つともいえるキリスト教に少しでも触れて、何かを感じていただければと考えております。

<名古屋キャンパス> : チャペルアワー 火曜日12:40~13:10白鳥学舎チャペル
カレッジアワー 木曜日12:40~13:10白鳥学舎チャペル

<瀬戸キャンパス> : チャペルアワー 金曜日13:00~13:30瀬戸学舎チャペル

詳しくはチャペル前の掲示板をご覧ください。

その他、チャペルでは音楽の集いや読書会など、様々な活動を行っています。またチャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着きたいときはどうぞお気軽にご利用してください。祈りの場として黙想の場として皆様を招いています。

まして、何かを信じるまたは仰ぐといった心を皆持っている、そういう意味で宗教的な存在であるといえます。それは、動物にはない部分です。ところが悲しいことに、人間は自分が犯した罪のために、霊的に死んでしまった状態であると聖書では述べております。そのことにおいて、真の神の存在が分からなくなっており、そしてまた神に応答することも出来なくなっております。神との交流も困難になってしまっているのです。そのような人間の状態が聖書には書かれております。新約聖書のローマ人への手紙3章23節にはこのように書いてあります。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています…。」本来であれば、神と交流し応答することが出来る、また祝福を受けることが出来たはずの存在だったのですが、その犯した罪のため神との関係が断絶してしまったという人間の状態が述べられております。

私たちは体の健康を気にします。しかし、肉体の健康あるいは精神の健康だけで、人間の真の意味での健康を測ることが出来るのでしょうか？私にはそうは思えません。むしろ本当の神を知っている人々の中に、肉体的な健康が十分でなくても自分の生きる意味を知り、生き生きと輝いて生きている人はたくさんいるわけです。そのことを考えますときに、肉体の健康そして精神の健康だけで人間の健康を測るのは難しいのではと思うのです。この両面で健康であっても、人間の健康が満たされているかといったら必ずしもそうではないと思うのです。聖書でも述べられているように、人間としての霊の部分で満たされ、生かされ、真の神との交流

が本当の意味で出来るようになって初めて、真の人間性を取り戻すことが出来る、本来の人間としての生きる意味と満足感などを見出すことが出来るのではないのでしょうか。その様に私は聖書を通して理解し、信じるのです。つまり、断片的な健康ではなくてトータル的な意味での健康というものが、私たちに求められているのではないかと思います。昔のキリスト教の教父の言葉に、このような言葉がございます。「人の心には神によってしか埋められない空洞がある。」

益々これから高齢化社会になっていくわけですが、そのような時代にありまして霊的あるいは宗教的な部分が一層問われていくのではないのでしょうか。人間は動物と明らかに違う部分を持ったスピリチュアルな存在であります。この霊的な部分を全く無視した人間学があるとしたら、必ずそこには限界が出てくると思います。神を信じることで、そして神様と交流してゆくことで、本当の人間性を取り戻し、満足を見出し、トータルな意味での真の健康を回復することが出来るのだと思います。

皆さんが、本当の意味での人間学をこのキリスト教主義大学で学んでほしいと願っています。最後にローマ人の手紙5章1節～2節を朗読したいと思います。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」

(はまたにつとむ 瀬戸聖書バプテスト教会牧師 2007.5.25 チャペルアワー奨励)

復活の喜び

大宮有博

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

(新約聖書 ヨハネによる福音書20章19節～23節)

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。名古屋学院大学は今からちょうど120年前の1887年に、メソジストプロテスタント教会の宣教師フレデリック・C・クライン博士によって創られた愛知英語学校を前身とする、伝統あるキリスト教主義大学です。大学は、1964年に経済学部が設置され、その後学部が増え、2006年は人間健康学部が新たに設置されました。

さて、チャペルアワーでお話をするに際し、ヨハネによる福音書の20章19節～23節を選びました。この話は、イエスという人が死後復活されたという物語です。ここを選んだ理由は、先週の日曜日がキリストの復活を祝うイースターであったからということもありますが、同時に、私たちのこのキリスト教主義大学はイエス・キリストが復活をされたという事実があるからこそ存在していることを、皆さんにも知っていただきたいからなのです。ですので、

今日の聖書箇所を復活の物語にしました。

イースターは、イエスが復活したということを感じているキリスト者にとって非常に喜ばしいことではありますが、そうでない人にとっても喜びのメッセージなのであります。

つまりイエスの復活によって明らかになった“犯した罪で、赦しを求めて赦されない罪は無い”ということと、“赦され喜びのうちに新しい生を生きることが出来る”という、二つの福音のメッセージが、キリスト者でない人にも与えられているからです。

ヨハネによる福音書の物語によると、イエスは復活した朝、先ずマグダラナのマリアに会います。マグダラナのマリアの報告を聞いた弟子たちは緊張しながら、自分たちが人に発見されないよう鍵をかけて、部屋の中で息を潜めていました。すると、イエスがどこからともなく現れ、弟子たちの真ん中に

立ちます。そして、「あなたがたを世界に派遣する」と宣言した後、息を吹きかけ「聖霊を受けよ」と命じたのです。この時、弟子たちに与えられた権威についてのことが本日の聖書の最後の所に出てきます。それは人を赦す権限です。その権威は具体的にどうようものであったか、それについてはあとで述べたいと思います。

私たちはさまざまな罪を犯します。たとえば、赦されない罪を犯していただきます。もし、自分の犯したその罪をどれほど後悔しても、お詫びしても、償っても、絶対に赦されないとするならば、自分の生きている意味は何になるでしょうか。生きているということが、その人にとって、辛いことでしかなくなってしまいます。生きていることに希望がないならば、人は生きていることを絶望としか感じる事が出来ないわけであります。イエス・キリストという方について、皆さんはこれからキリスト教概説の時間で何回も繰り返し学ぶことになるとと思いますが、イエス・キリストは、“人間の犯す罪で赦されない罪は無い”ということをご自身の十字架の死と復活によってお示しになられたのです。この復活の喜び、希望に基づいて、私たち名古屋学院大学は教育と研究を行っているわけであります。

さて、では聖書のいう罪とはなんなのか考えてみましょう。

それは、基本的には「人間の神に対して行う反逆行為」と要約することが出来ます。神と人間の関係は、この反逆行為によって崩れてしまうと聖書は述べています。と同時に、神に対して犯した人間の罪が、隣人を苦しめないことがあるのでしょうか。これは神に対するものであり、人間には迷惑はかけて

いない、そんなことがあるのでしょうか。実は、人間が神に対して犯す罪は、隣人をも苦しめることにつながっているのです。ですので、人は神に赦しを求めると同時に、常に隣人に対して赦しを求める謙虚さ、真摯さが必要とされるわけです。人間の神に対する反逆行為、すなわち罪とは、自分があたかも神であろうとすること、あるいはそのような錯覚に陥ることであります。その行為は例えば、私はあのより優れている、隣に座っているこのより優れている、賢い、美人だ、男前だという風に感じることであります。つまり、他人と比較して自分の方が優れていると思いがちになってしまうところから、いつしか自分は神に近い存在だ！というおごり、傲慢さが生まれてくるのかも知れません。

また神に対する罪が、隣人に対する罪と密接に結びついているように、実は、隣人に対して犯した罪は、神に対する罪でもあるのです。隣人を苦しめること、辱めることは、どの人のことも深く愛しておられる神の前に、赦される行為であるはずがありません。先ほどの弟子たちに与えられた赦しの権威とは、弟子たちが神に代わって人を赦すということではありません。そうではなく、私たち人間が神に対して罪の赦しを求め、赦し合い、そこに和解を作り出して新しい社会を作る。そういう勇気が、キリストの復活の際に、弟子たちに与えられた赦しの権威だったのです。

さて皆さん、赦しには勇気が必要です。私たちはしばしば赦しを求めることがあります。「あんな悪いことしてごめんね。」ということとはよくあることなのですが、赦す側には、赦すために多大な勇気を必要とすることを忘れてしまう

ことがあります。

たとえば相手を赦すということは、単に相手が犯した罪を忘れてしまうということではありません。相手の罪を認め、自分の過ちも認め、それを覚えることであります。犯した罪は、なるべく忘れてしまいたいものです。あるいは、相手が自分に対して行ったひどい仕打ちも、出来れば早く忘れてしまいたいものです。しかし、それを忘れてしまうのではなく、勇気をもって覚えて、同じ過ちを繰り返さないように努めること、そのことが赦しの行為の中に含まれるのです。

また赦しは諦めてしまうということではありません。赦せない相手をそのままほったらかしにするのではなく、相手に回心を求めると同時に、相手と共に歩むという勇気のいる行為なのであります。

そして、赦しは今までの古い歩みを捨て新しい生を、生きることであります。このように考えてみると、赦しというのは、勇気を必要とする行為であるということが分かります。

そんな勇気を持たれ歩んでおられる、こんな方がおられます。

今からちょうど10年前、ある少年が複数の小学生を殺傷するという凄惨な事件が起きました。私はその時、事故現場が見える教会の神学生をしておりました。本当に大変な現場でした。あの時自分の娘が殺された方が、友人から勧められて事件の9ヵ月後に出した本があります。そこには突然愛する娘を奪われたお母さんが、必死で事実と向き合おうとする、壮絶な取り組みが描写されています。お母さんは当初、犯人

を娘と同じ目に遭わせて、自分も死のうと考えていたと述べています。加害者を憎しみ続けることが、娘を奪われた親の務めと思っていたとも書いてあります。そのお母様が、苦しみながら発見したのは、生きる、ということだったのです。

事件から10年経って、今でもこのお母様は事件の語り部として色々なところで講演しておられます。私は先月その方の新聞記事を読んで、胸を打たれました。社会復帰した加害者の男性から貰ったお詫びの手紙を読んでも赦す気にはなれないが、10年の年月と人の縁が彼を変えつつあると信じたい、と彼女はインタビューで答えておられました。そして、ある講演会で、加害者の少年から送られてきた手紙にほっとしたと述べています。

赦すことの難しさを、赦しを求める側は決して忘れてはならないのです。

人は赦される可能性があるということが、人間のこの世界での生きる勇気につながります。そして、その勇気を私たちに証し続けているのが、イエス・キリストの復活の物語なのです。人は赦される可能性に導かれているということ、イエス・キリストの復活の出来事を通して、皆さんに是非覚えていただきたいと思えます。

皆さん、これから4年間キリスト教主義大学である名古屋学院大学で、たくさんのお話を学びたいと思います。どうか、この大学で真理を目指して、一生懸命勉強してください。私たちも、皆さん方の学びをサポートしてゆきたいと思えます。

(おおみやともひろ 商学部講師 2007.4.13 チャペルアワー奨励)